

ユーザビリティを追求した 交通社会のデザイン

都市計画学の視点から

土井健司 Kenji DOI



大阪大学大学院工学研究科教授

交通社会のデザインとは、どのような行為や思考であろうか。一般には、伝えたいメッセージを有し、それを印象付けるアイデアと伝えるための造形表現を備えた合目的な行為を、デザインと呼ぶ。また、近年では、分野を横断した創造的な問題解決の方法が「デザイン思考」として注目を集めている。デザインの本質は合目的性と分野横断性にあるとあってよい。その文脈に照らせば、「10年後の理想的な交通社会をデザインしよう」というテーマは、学際性を柱とするIATSSの四十周年の節目にふさわしいメッセージ指向のテーマと思われる。筆者はIATSSの一員として、これを都市計画やデザインの観点から考えたい。

人口減少および超高齢化に起因した諸問題が常態化、深刻化する中で、巨大災害リスクへの対応が急がれるわが国においては、都市や国土デザインの抜本的な方向転換が求められている。持続可能な縮退都市を前提としつつ、地域活力を育むための創造都市や国際競争力の高いメガリージョンの形成を進めていく必要がある。

縮退都市戦略と創造都市戦略とは表裏一体のものである。両者の実現のためには人・モノ・カネ・情報・知識、そして時間という資源の結び付きが再構成されなければならない。その鍵となるのがモビリティである。モビリティは人やモノの移動の自由度を指すとともに、様々な資源の利用能力を表す。筆者は理想的な交通社会をデザインする上で、モビリティ＝資源の利用能力を高めるための「社会的ユーザビリティの追求」が重要と考える。

ユーザビリティとは、図に示すようにアクセシビリティを超えた高次の人間工学的領域である。使い得る現在の交通システムを、身体的、

生理的に「使いやすい」レベルへ、さらに心理的に「使ってみよう」レベルへ引き上げていくためには、交通手段、インフラ、空間および制度にわたる総合的なデザインが必要とされる。その際、都市部では、多様な交通モードやその利用者が安全かつ公平に交通空間を活用するためには、明確な理念と優先順位の下に、デザイン思考により空間の階層化と交通速度の階層化を図り、社会的満足度としてのユーザビリティを高めるプロセスが欠かせない。こうしたユーザビリティ重視のアプローチにより、以下の特徴を備えた次世代の交通社会の実現が期待される。

① トランスモーダリティ

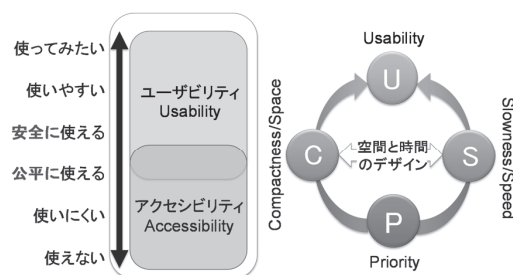
交通結節機能の高度化によるシームレスなモード間連携の実現と交流・回遊性の創出

② ニーズ即応型のモビリティ

ITSの活用や空間・制度の柔軟な運用による利用者のニーズ、状況に応じた交通サービスの提供

③ コモビリティ

コミュニティの連帯感と個人のモビリティを両立させる共有型の交通サービスの提供



名古屋大学大学院博士後期課程修了後、同大学助手、東京工業大学講師および助教授、フィリピン大学国立交通研究センター客員教授、香川大学教授を経て、2012年より現職。モビリティコンセプターとして都市と交通の将来像を探る。(会員/2007年会員就任)